

3 | P-30

婦人科悪性腫瘍に対する十全大補湯と免疫療法の併用による Tumor Dormancy Therapy

東京医科大学・産科婦人科学¹⁾, 東京大学・医学部・生体防御機能学²⁾,

日本大学・医学部・第三外科³⁾

○星野泰三¹⁾, 丁 宗鐵²⁾, 関根暉彬³⁾, 高山雅臣¹⁾

【目的】婦人科悪性腫瘍に対してCDDPを中心とする化学療法は初発例に対して有効なことが多く、再発例に対してTaxol, CPT-11の登場により有効性が改善されつつある。しかし、それらの治療は全症例に対して有効ではない。とりわけ、奏効性の低い症例に化学療法を継続した場合、免疫能の低下を始め全身状態の悪化を招き患者に苦痛を強いることも危惧される。そのような完治断念治療においても何らかの治療を希望する患者も多い。そこで免疫能の向上をめざしQOLの改善と内因性IFN- α などの誘導による腫瘍増殖抑制、Tumor Dormancyが期待できる漢方薬と免疫療法の併用を試みた。

【対象と方法】卵巣癌など婦人科の悪性腫瘍で完治断念症例を対象とした。本人の同意を得た後、外来で漢方薬と免疫療法を行った。免疫療法は自己活性化リンパ球を用いた。まず患者の末梢血からリンパ球画分を分離し、抗CD3 抗体固相化フラスコを用いて活性化Tリンパ球を誘導した。つぎにIL-2, 10%ヒト血清を含むRPMI-1640培地で培養した。14日後にharvestし、元の患者に投与した。

【結果】今回は婦人科悪性腫瘍の完治断念例10例に対して免疫能改善を目的として外来でweekly 活性化リンパ球療法、自宅における補助療法として十全大補湯を用いた。無治療例11例に比べ末梢リンパ球からのIFN- α , IL-2産生能やNK活性の回復がみられた。臨床的にも腫瘍の増殖が抑制されただけでなく末梢循環改善に伴う除痛や下垂体機能など内分泌系の調整によりQOLの改善をみた。

【考察】先端医療と漢方薬の組み合わせは一見奇異な印象を与えるかもしれない。しかし抗癌剤や放射線治療の副作用を漢方薬が軽減したり効果を高めたりすることが、すでに報告されている。漢方薬の全身への作用は、限界に挑む先端医療の欠陥を補いその効果を高め安定させる可能性がある。ここに報告した症例はいずれも厳然として腫瘍が存在している。抗癌効果は腫瘍の退縮をもってするという判定基準を適応すれば全く無効例ということになってしまう。本治療は完治断念例に対して簡便な通院治療であり社会生活上有意義かつ抗腫瘍効果的にもTumor Dormancy Therapyの要件を兼ねた延命治療と考えられた。